

## [006]九州大学総合研究博物館ニュース

<https://doi.org/10.15017/25302>

---

出版情報：九州大学総合研究博物館ニュース. 6, pp.1-8, 2006-03. 九州大学総合研究博物館  
バージョン：  
権利関係：

# 九州大学総合研究 博物館ニュース

March 2006 No.6

## 総合研究博物館の過渡的施設整備

九州大学総合研究博物館 館長 村江 達士

### 1. 九州大学総合研究博物館の活動指針について

九州大学総合研究博物館（以後、九大博物館と略称）では、九州大学理事、杉岡前九州大学総長、福岡市博物館長など学外関係者、全学の各部局から選出された運営委員会委員、名誉教授を主体とした協力研究員、並びに専任教員の間で、平成17年度に2度の意見交換を行いました。その結果、下記の活動指針を策定しました。この指針は、今年1月31日の朝日新聞に九州大学が出した全面広告「新しいアジアと知の拠点」の冒頭に梶山総長が述べられた「市民の方が知的生活を楽しんでいただけるようにします。そのために、例えば、図書館を24時間開館します。博物館も作り、課外授業で訪れた小中学生を九大生が案内します」という約束を実現し、かつ箱島朝日新聞社顧問の「あくまでも大学の主体性を失わないように」という要望をかなえるものです。

### 九州大学総合研究博物館の活動指針

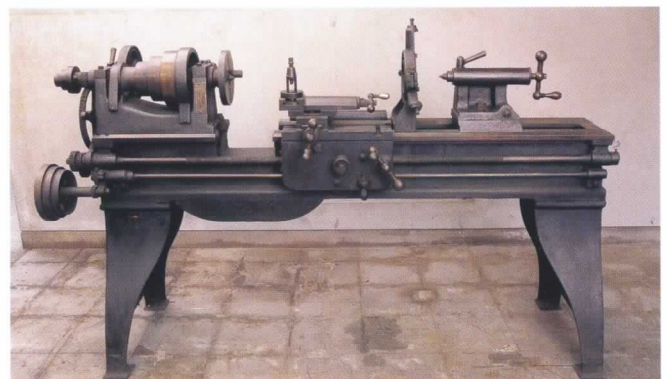
- ①今後の大学博物館は、大学の研究成果の歴史を示す場所として、ものの持つ情報とそれを使った研究成果を伝えるべきであり、そこでは研究者個人の顔が見え、研究に人間的な親しみを持たせる展示を行うべきである。
- ②九大博物館は、九州大学の歴史・学風を示すと同時に、過去に行ってきた社会貢献を世間に示す場となるべきである。
- ③全年齢層を対象とした生涯学習の材料として、それらの研究成果を広く学外に紹介し、大学を市民に親しみ易いものにする役目を担うべきである。
- ④それらの研究成果を学生・生徒への教材として提供する場合には、学校教育の担当者との連携を深め、授業の一環として成立させるべきである。
- ⑤情報提供の方法論そのものも博物館における研究対象とすべきである。

### 2. 当面のキャンパス事情において活動指針を 実行するために

上記の活動指針を実行するには、九大博物館が独自の常設展示場を持つことが必須の条件となります。新キャンパスへの移転が完了した時点では、新しい九大博物館が建設されており、そこでは、上記の指針に沿った活動がフルに行われることとなりますが、それまでには10年以上の歳月が必要となります。そこで、とりあえず工学系部局が移転した跡の建物を利用して、仮設の常設展示場と標本・資料の保存収蔵施設を設け、本格的施設の完成へ向けての下準備をすることを計画しております。以下、その検討状況をお伝えいたしますので、是非ご理解とご協力を頂きたいと思っております。

### 3. 仮設展示施設の整備

当面の展示施設として、具体的には、工学部2号館工場（知能機械実験室）跡を候補として考えております。ここが候補として挙げられる理由は、次のとおりです。①建物全体が既に無人状態になっている、②建物の半分はスレート葺の工場で、当面の利用希望部局が無い、③工場建屋は空間が大きくて展示の発想に自由度が大きい、④地下鉄箱崎九大前駅に近いので、学外への一般公開施設としては地の利を得ている、⑤コンクリートの建屋の2階部分に多量



1912年にアメリカから購入された施設

の骨格標本が収蔵されており、これらは将来的に博物館に帰属する予定である、⑥工場建屋に残置された大型の工作機械は、明治時代のもので資料的価値が高いため、既に博物館の所有物となっている、などです。ただし、老朽化した工場建屋をある程度見栄えのする公開施設に改修するには、たとえ仮設とはいえ結構な額の費用がかかります。この計画のネックは、いずれ売却する移転跡地の建物の補修にどの程度の費用が認められるかです。

展示施設に想定している工場建屋の特徴を生かした技術史系の展示計画としては、①鋳物の実習室に、新キャンパスで発掘された古代の製鉄所跡の実物大の巨大なレプリカ（製作済みで、分割して製作元で有料保管）を置き、大学の実習教育に使われた鋳物施設と対比させ、さらに、最近九州大学で行われた材料・素材の研究紹介につなげる、②工作機械工場では、天井を透明なものにし、空間に迫力を持たせるとともに、現代の先端的ロボット工作機械への流れを九大で行われた研究成果を交えながら示す、などが当面考えられます。その他、建物の補修計画と歩調を合わせ

て、今後いろいろなプランを検討していきます。その中には、大学文書館や記録資料館との共同企画も組みたいと考えています。

#### 4. 標本・資料の仮設収蔵施設

一方で、九州大学の場合、上記の大学博物館の活動指針を実現する根本となる標本・資料が、キャンパス移転に伴って散逸する危険が現実のものとなっています。これは、新キャンパスにおいて個人の研究者に割り当てられるスペースが狭く、過去の研究資産を持ち込むゆとりが無いためです。この危機を回避するには、とりあえず、箱崎に全学の標本・資料を収蔵できるスペースを確保し、移転の進行に合わせて順次収蔵し、最終的に博物館が建設された時点で一括して移動させる以外に、手立てはありません。貴重な標本や資料を安全確実に収蔵保管するためには、専用の独立した建物が必要で、その確保が緊急な検討課題となっています。全学的なご理解とご協力をお願いする次第です。

## 古人骨・動物骨格標本資料の移転と移管

石川 健

平成6年に比較社会文化研究科が創設された際に、当時の医学部解剖学教室に収蔵されていた古人骨及び動物骨格標本等の資料は比文に設置された考古人類資料室に移管された。ただ、六本松キャンパスは手狭であったため、それまでの保管場所である医学部基礎A棟の2階と4階を借用する形で平成17年まで経過した。ところが、基礎A棟の改修工事のため、昨年9月末から10月初旬にかけて、古人骨と動物骨格標本資料を移転することとなった。移転先は箱崎地区工学部キャンパス内旧知能機械実験室の2階部分である。そして、これを機会として、これらの資料を九州大学総合研究博物館に移管することとなっ

たのである。

詳細は後述するが、比較社会文化研究院考古人類資料室には、縄文時代から近世・現代にかけての古人骨資料約3000体と脊椎動物の骨格標本多数が収蔵されていた。これらの膨大な資料を移転するため、9月下旬から引っ越しのための準備及び引っ越し作業を行った。この間、人骨収納キャビネット（約2000ケース）解体作業にはじまり業者委託による資料移転に至るまで、諸般の事情により、比較社会文化学府・人文科学府の学生諸氏にほぼ総動員態勢で労働奉仕をして頂いた。作業開始時から残暑の最中非常にハードな作業であったが、学生諸氏の献身的な協力のおかげで、当初の予定通り無事引っ越し作業を終了することができた。最終的に今回の移転作業に従事してくれた学生は、学部生20名、大学院生19名の合計39名にのぼった。本当にありがとうございました。

以上のような作業をへて資料の移転が行われたが、現在これらの資料が収蔵されている旧知能機



図1 人骨キャビネット設置作業



図2 人骨キャビネット設置完了



図3 ヒクイドリ骨格標本

械実験室2階は、古人骨展示室、動物骨格標本展示室（2部屋）、古人骨収蔵室（2部屋）、作業室に大きく分けられている。以下、収蔵資料の特徴について簡単にふれる。

脊椎動物の骨格標本は約200体あり、そのうち、今日では希有な交連骨格標本を多数含むことから、学術的また博物館資料としての価値が高いコレクションである。これらの交連骨格標本には、ヒクイドリ等の現在では絶滅のおそれのある種に指定されている希少動物も含まれており、



図4 動物骨格標本展示風景

またサイ等の化石資料も含まれる。

古人骨標本については、1950年医学部に着任した金関丈夫教授により、主に日本人の起源問題をテーマとした西日本各地の遺跡発掘調査の過程で収集された古人骨や、金関教授の後継者として医学部解剖学教室で人類学を研究していた永井昌文教授の調査・収集による、弥生時代を中心とした縄文時代から近世に至る、大量の古人骨を収蔵する。資料の特徴として、北部九州から山陰地方で発掘された弥生人骨、九州各地古墳人骨、中・近世西日本人骨約2000体を含み、その中の代表的なものとして、金隈遺跡（136体）、土井ヶ浜遺跡（190体）、古浦遺跡（48体）出土の弥生人骨、吉母浜遺跡（118体）出土の近世人骨などがあげられる。なかでも、金関丈夫教授により行われた、日本人起源問題をテーマとした西日本各地の遺跡発掘調査の過程で収集された弥生時代を中心とした古人骨資料は、日本人の起源を研究する上で欠かせない貴重な資料である。

今後、これらの資料が、総合研究博物館の基幹資料として、比較社会文化研究院だけでなく広く学界で活用され、研究に寄与することを望んでやまない。

（比較社会文化研究院・基層構造講座 資料部兼任教員）

## 新雲母族鉱物“シロズ(白水)雲母Shirozulite”

石田 清隆

黒雲母や白雲母はおそらく石英（水晶）に次いで幼少から馴染みの鉱物でしょう。実際に雲母族鉱物の主要なものが命名されたのは、リシア雲母—1792年、黒雲母—1847年、金雲母—1841年、アナイト（鉄雲母）—1868年と極めて古く、モスクワ産のガラスを白雲母（muscovite）と呼び始めたのが1850年です。今回報告する白水雲母（図1でやや赤みがかかった褐色の劈開明瞭な鉱物）は黒雲母の仲間、2001年になって発見承認された新鉱物です（承認番号IMA 2001-0045、記載論文は、K. Ishida, F. C. Hawthorne and F. Hirowatari, 2004. American Mineralogist, 89: 232-238）。

雲母族鉱物の結晶構造は、層状の向かい合う四面体層 [(Si,Al)-O]（図2で水色）とそれに挟まれた八面体層 [(Mg,Fe,Mn,Li, etc)-O]（青色）、その間をつなぐK、Na、Ca、などの大きな陽イオン（大きな赤マル）、および(OH,F)（プロトンの小さな赤マル）とが1セットになった構造をしています。白水雲母は3個の八面体層の半分以上をMnが占めるので、Mg（金雲母）—Fe（アナイト）系の従来の黒雲母シリーズにもう1つの端成分の発見として重要な意義があります。すなわち、3八面体型の雲母は今回の白水雲母が加わり、

$K(Mg,Fe,Mn)_3(Si_3Al)O_{10}(OH,F)_2$ のように3成分系で表すことが出来ます。従来の合成実験ではイオン半径の大きなMnは八面体の3割以上は入らないとされてきました。つまり、四面体層と八面体層のミスフィットが大きくなり過ぎて安定に存在出来ないとされてきました。しかし、この試料の場合はその八面体の半分以上をMnが入っているので、新種になります。

当試料のX線単結晶構造解析と化学組成分析を行った結果から、Mnを半分以上含んでも安定な構造であることが分かりました。すなわち、四面体は原子数Si:Alが2.54:1.46とSiよりイオン半径の大きなAlに富んでおり、

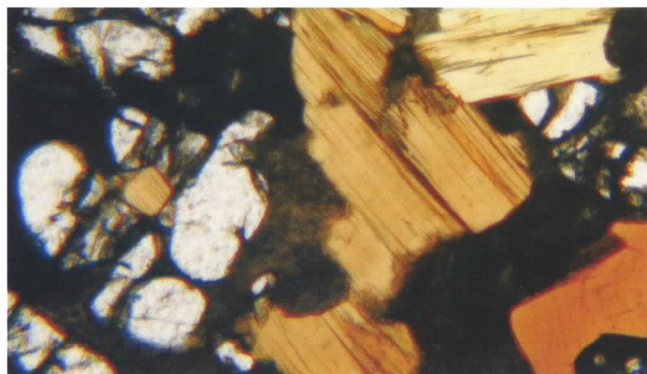


図1 白水雲母の偏光顕微鏡写真 横幅が約1.5mm

したがって Si:Al = 3:1 の四面体より大きな四面体層であるため、八面体層に多くの Mn が入ることができます。八面体は少し扁平になって a 軸と b 軸両方向に伸長しており、また四面体は 8.36° づつ回転して、これは八面体とは逆に a 軸と b 軸両方向に縮小しているの、したがって四面

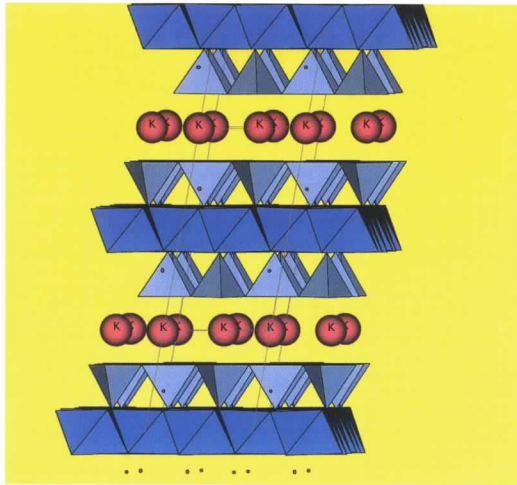


図2 雲母族鉱物の結晶構造

体が回転しないであれば、Mn は更に八面体の 3 分の 2 くらいまで含むことが可能であることも分かりました。

この新鉱物は、粘土鉱物の研究で著名な白水晴雄九州大学名誉教授に因み命名しました。白水先生には大変名誉なことと喜んでくださり、ささやかな返返しになったと思っています。また、この白水雲母の発見・記載は、単結晶構造解析をしたフランク・ホーソン教授（カナダ・マニトバ大学）、試料を提供して頂いた広渡文利九州大学名誉教授と、私（石田）との3名により行われました。

謝辞：当九州大学総合研究博物館の中牟田義博助教授にはX線ガンダルフカメラのデータを測定して頂いた。また、同松隈明彦教授および青木義和九州大学名誉教授には鉱物命名に関し御教示をいただいた。さらに、進野 勇九州大学（元）教授には、EPMA-EDS装置の御教示と多大な便宜を受けた。記して心よりの謝意を表します。

（大学院比較社会文化研究院・環境変動部門 資料部兼任教員）

## ナンゴクデンジソウのある風景

福原 美恵子



総合研究博物館の公開展示「九州大学所蔵標本資料展Ⅰ—自然界の仲間たち」は、ご覧いただきましたでしょうか？展示内容の一部はインターネットミュージアムでご覧いただけます（<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>）。本展示には、「デンジイ」と名付けたマスコットをポスター等に登場させています（図1）。このモデルとなったのは、糸島半島の田園地帯で観察した「ナンゴクデンジソウ」という植物です。「デンジイ」という名前はデンジソウをもじった「田爺」で、おじいさんにしたのは、絶滅危惧植物である本種がいつまでも存続するよという願いも込めています。



図1 「デンジイ」

と書きますが、四枚の小葉は文字通り「田」の字そっくりです。陸上で生育しているものは、傘のように葉柄の上に小葉を広げ、こんもりと茂りますが、水中に生育しているものは、スイレンのように水面に葉だけが浮かびます。

日本にはデンジソウとナンゴクデンジソウの2種類が生育しています。デンジソウは冬には葉が枯れてしまいますが、ナンゴクデンジソウは常緑です。デンジソウがユーラシア大陸、北海道南西部以南の日本全土に分布するのに対

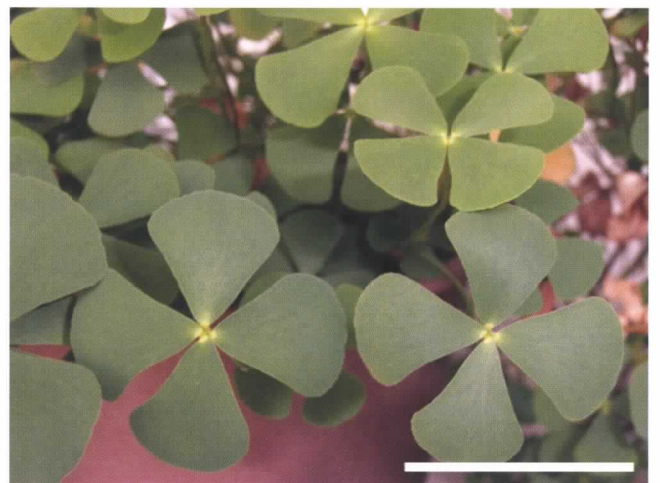


図2 ナンゴクデンジソウ（白線：3cm）

して、ナンゴクデンジソウは本州以西、さらに東南アジアにも分布します。以上のような違いはありますが、デンジソウもナンゴクデンジソウも外見はよく似ており、きちんと見分けるには、孢子嚢果（ほうしのうか）と呼ばれる生殖器官を観察する必要があります（図4）。デンジソウは孢子嚢果が葉柄の付け根より上に枝分かれして着くのに対し、ナンゴクデンジソウは孢子嚢果が葉柄の付け根に着きます。

デンジソウが他のシダと大きく異なる点は、この孢子嚢果です。シダ類は花を持たず、葉が光合成と生殖の両方を担っています。シダの葉を何気なくひっくり返して、その裏の茶色いうじゃうじゃしたものに気づき、ギョッとした経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか？この茶色いうじゃうじゃしたものは孢子嚢群と呼ばれ、孢子嚢（孢子の入った袋）が多数集まったものです。孢子嚢群が葉のどの場所につくかは種類によって定まっています。デンジソウ類も葉を起源とする組織に孢子嚢が形成される点は同じなのですが、見た目はとても違って、堅い豆のような形をしていて孢子嚢果とよばれます。孢子嚢果は自然状態では2、3年間は開かず、その後、孢子の発芽に必要な水分条件が得られると、水を吸って開き、孢子嚢群が付着した芋虫のような形のゼラチン状の円柱構造が現れるとのことです。筆者はその様子を観察したくて、孢子嚢果を水に浸けたりしてみたのですが、うまく観察できていません。放出されたゼラチン構造は、さらに吸水して膨張を続け、組織が壊れ、孢子が放出されます。

ナンゴクデンジソウもデンジソウも水田、用水路、氾濫を伴う湿地など、生育中の一時期が湿潤になる環境に群生します。したがって、昔ながらの水田は最適な生育地の一つで、そのため、かつては非常に厄介な水田雑草だったそうです。しかし、除草剤に対する感受性が高く、また、水



図3 ナンゴクデンジソウの枝先 (白線:2cm)

田の放棄による生育地の乾燥とそれとともない他の植物がおおって生育環境が悪化し、両種とも絶滅の危機に瀕しています。環境省のレッドデータブックでは、ナンゴクデンジソウは絶滅危惧Ⅰ類（CR）という最上級のランクに位置し、最悪の場合10年以内に野生では絶滅するおそれがあるほどの高い危険にさらされています。また、デンジソウも、現在の状態をもたらした圧迫要因がひきつづき作用する場合近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行するのが確実と考えられる絶滅危惧Ⅱ類



図4 ナンゴクデンジソウの若い孢子嚢果 (白線:5mm)、成熟すると茶色になる

(VU) というランクに位置しています。

北部九州に稲作が伝わってから2000年かそれ以上の時間、ナンゴクデンジソウは人間の生活のすぐ近くですごしてきたのかもしれませんが。しかし、過去から受け継いだ糸島半島の里山の風景は、現在、あたりまえにあるのではなく、その地に住む人たちの努力によって守られている面があります。筆者がナンゴクデンジソウを観察した今津干潟（博多湾西部の瑞梅寺川河口にある河口干潟）の近くにある水田は、減農薬、減化学肥料栽培に取り組んでいる趣旨の立て札がありました。水路にはメダカやモツゴ、カダヤシの姿がちらちらとして、足音に驚くのか、ぼちゃんとカエルかなにかが水に飛び込む音もします。ナンゴクデンジソウが風になびき、あるいは、水面に漂う風景の中を歩くことは大変気持ちのよいものです。もちろん、そうした場所をクローバーに似た野草が生えているなど思いながら歩いても、その気持ち良さは変わらないと思います。けれど、そこにあるものの持つ情報も知ることができたとき、風景はより深みをますのではないのでしょうか。

(総合研究博物館 研究支援推進員)

#### 参考文献

- 矢原徹一・永田芳男(2003) レッドデータプランツ.山と溪谷社、東京.
- 岩槻邦男(1992) 日本の野生植物シダ.平凡社、東京.
- アーネスト M. ギフォード・エイドリヤンス S. フォスター著 長谷部光泰・鈴木武・植田邦彦 監訳 (2002) 維管束植物の形態と進化 原書第3版.文一総合出版、東京.

考古学界では<sup>14</sup>C年代法自体の妥当性について疑問を持つ人もいるが、ここではAMS法で何を試料とするかに話を絞る。

国立歴史民俗博物館（歴博）は土器の外面に付着した煤を分析したが、これには問題がある。その煤に含まれる炭素は燃料として用いた樹木に由来するもので、樹齢の古い大木の芯の炭素や、樹木が土壌から吸い上げた古い炭素、すなわち土器を作った時代よりずっと前の時代の炭素を含む可能性がある。つまり煤の年代が土器の年代を示さない危険性がある。そこで煤を試料とすることに疑問を感じた九州大学比較社会文化研究院の田中良之教授・溝口孝司助教授らは、歴博年代の検証のために、甕棺出土人骨のAMS測定を行った。人骨の相対年代は、それを納めていた甕棺の土器型式から細かく決定することができるし、人骨の暦年代から直ちに甕棺編年に絶対年代を与えることができる。

ところで従来、人骨の<sup>14</sup>Cを測定するのは問題だと言われてきた。人間は陸上生物だけでなく海洋生物も食べるので、「海洋リザーバー効果」の影響を受けるからである。海洋生物は大気中の二酸化炭素でなく海洋中の炭素を取り込んでいるが、海洋中の<sup>14</sup>C濃度は大気中より低くなる。なぜなら深層水は800年も滞留しているのだから、その間に<sup>14</sup>Cが壊れて大気中よりも低い濃度になるからである。そのため海洋生物は同時期の陸上生物に比して<sup>14</sup>Cの濃度が低いので、人間をはじめとして海洋生物を食べる陸上生物

の<sup>14</sup>C年代も、そうでない陸上生物に比して古く出る。土器に付着した「おこげ」の<sup>14</sup>C年代も、海洋生物の調理の結果であれば古く出る。

海洋リザーバー効果は、同じ炭素でも安定同位体の比を分析すれば補正できる。植物は炭酸ガスを取り込んで光合成を行って有機物を合成するが、その有機物に含まれる炭素安定同位体<sup>13</sup>Cの<sup>12</sup>Cに対する比(δ<sup>13</sup>C)は、植物の種類によって異なる。C3植物(高等堅果類・イネ・コムギなど、-26.5%)、海洋性植物プランクトン(-19.5%)、C4植物(ヒエ・アワ・キビなど、-12.5%)の順で値が高くなる。そして、植物-草食性動物-肉食性動物、あるいはプランクトン-小型魚類-貝類-大型魚類という食物連鎖で上位者のδ<sup>13</sup>C値は(上位者になるほど1%を加える)、最下位者が、C3植物・プランクトン・C4植物のどれかによって差が出てくる。雑食性動物の場合、食物の組成に従って比例配分した値になる。こうして、人骨に含まれる炭素安定同位体比によって、どの程度海産食物を食べていたか推定でき、それによって海洋リザーバー効果を補正できる。ただし海洋リザーバー効果は、海水の循環の影響を受け、海域によって一定ではないので(ローカルリザーバー効果)、その補正は簡単ではない。

そこで田中・溝口両氏は水産物をあまり食べていなさそうな内陸部出土の人骨と、草食性のシカの骨を試料とした。イノシシは人間の食べ残しを食べている可能性があつてシカほど適さない。分析をAMS法では信頼度に定評が

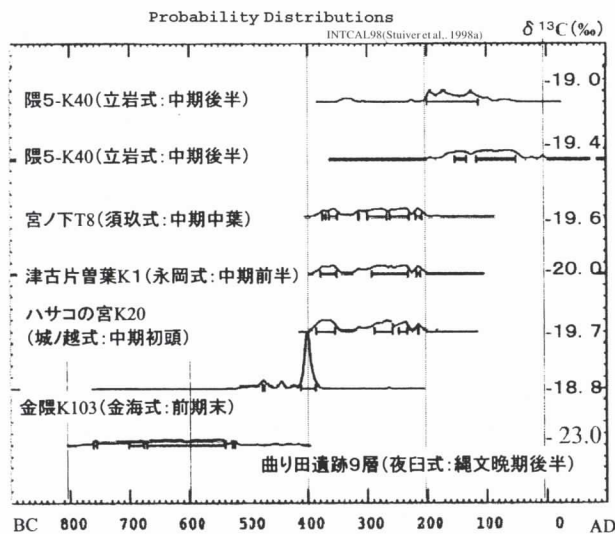


図1 AMS<sup>14</sup>C 較正年代  
左端の「隼5-K40」などは遺跡名と人骨を出土した甕棺の番号を示す。(立岩式: 中期後半)などは甕棺の型式と時期を示す。最下段の曲り田遺跡9層のみは人骨でなくシカ骨で、「縄文晩期後半」とあるのは、「弥生早期」と言い換えて良い。グラフはそれぞれの骨のAMS<sup>14</sup>C 較正年代の確率分布であり、年代に幅があるのは前号で書いた事情による。右端にδ<sup>13</sup>C値を示したが、海産物を食べず陸産食物のみのシカ骨のδ<sup>13</sup>C値(-23.0‰)と人骨の値を比較すると、内陸部出土の人骨でも海産物を摂取しており、海洋リザーバー効果を考慮する必要があることがわかる。

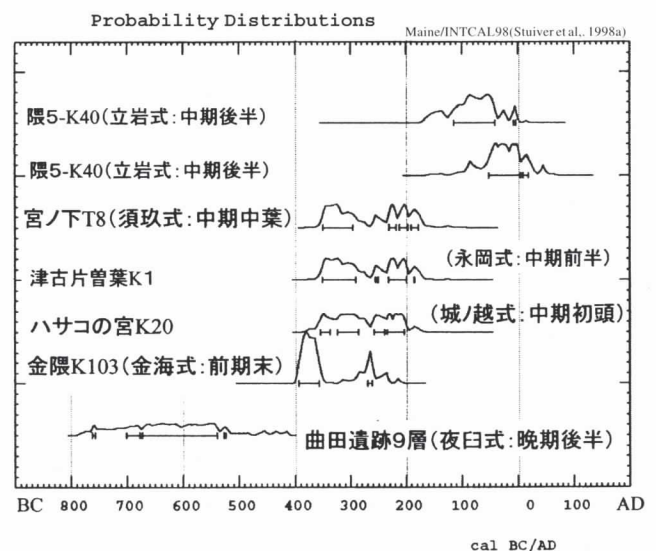


図2 AMS<sup>14</sup>C 較正年代のδ<sup>13</sup>Cによる補正值  
補正法の妥当性が十分かどうかさらに検討を要するが、<sup>14</sup>C測定値のわずかな補正でも較正曲線がフラットな部分では年代が大きく動いてしまう。弥生時代開始期や中期がちょうどそうした部分に相当するから厄介なのである。

ある Oxford 大学の Tom Higham 氏に依頼した。その結果 (図 1) を見ると、 $^{14}\text{C}$  較正年代は弥生早期：前 7～5 世紀、中期初頭～中頃：前 4～3 世紀、中期後半：前 2～1 世紀で、海洋リザーバー効果がかかっているにもかかわらず、歴博年代より新しく出ている。それより古くはならないとは言えるわけであるから、歴博年代に再考を迫るのは間違いない。それを  $\delta^{13}\text{C}$  値で補正すると、さらに若干新しくなる (図 2)。しかしそれでも通説よりまだ古く出ているのは、海洋リザーバー効果がゼロになってはいないからだ、私は考えている。(以下次号)

参考文献

田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom Higham 2004「弥生人骨を用いた AMS 年代測定 (予察)」『日・韓交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会  
 Brian Chisholm・小池裕子・中井信之 1988「炭素安定同位体比法による古代食性の研究」『考古学と自然科学』20  
 (総合研究博物館一次資料研究系 考古学)

## 2005 九州大学総合研究博物館公開講演会 シーボルトが集めたニッポン

期 日／平成17年11月13日(日) 場 所／九州大学50周年記念講堂4F 大会議室

1796年、ドイツのヴェルツブルクに誕生したシーボルト (在日期間 1823～1829, 1859～1862年) は、長崎の出島にあったオランダ商館の医者として来日し、高野長英ら数十名の門下生に医学を教えるとともに、日本に関する博物学調査を行い、その研究成果は『日本』『日本動物誌』『日本植物誌』として刊行され、当時のヨーロッパで大反響を呼びました。彼は「鎖国」の日本で資料・標本をどのように集め、いかに研究したのか、4人の講演者にわかりやすくお話いただきました。学内外から約100名の参加者があり、好評でした。



『日本』・『日本動物誌』・『日本植物誌』

<略年譜>

1796年(寛政8)	シーボルト誕生
1820年(文政3)	24歳 ヴェルツブルク大学医学部卒業 内科・外科・産科の学位
1822年(文政5)	26歳 オランダ領東インド陸軍外科 軍医少佐としてバタビアへ
1823年8月12日	27歳 長崎・出島に上陸
1826年(文政9)	30歳 江戸への参府
1828年(文政11)	32歳 「シーボルト事件」
1830年1月3日	34歳 日本を離れてバタビアへ
1832年	36歳 『日本』の刊行開始
1833年	37歳 『日本動物誌』・『日本植物誌』の 刊行開始
1859年(安政6)	63歳 2度目の来日
1862年(文久2)	66歳 日本を離れてバタビアへ、そして ライデンへ
1866年(慶応2)	70歳 ミュンヘンにて死去

【講師】

石山 禎一 氏 (東海大学、洋学史)

・シーボルトの日記からみた再来日時のコレクション

藤井 伸二 氏 (人間環境大学、植物分類学・植物生態学・保全生物学・博物館資料学)

・シーボルト植物コレクションにみる科学的収集

武石 全慈 氏

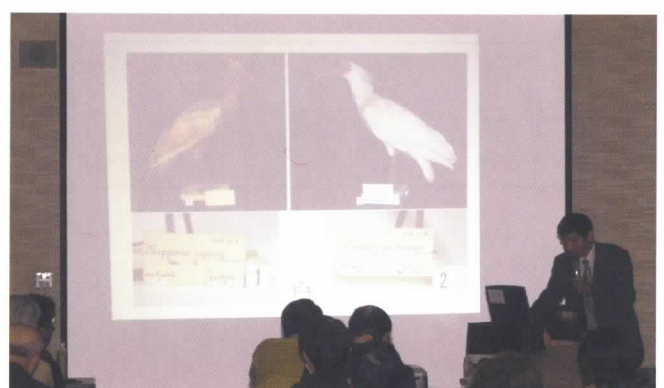
いのちのたび博物館 (北九州市立自然史・歴史博物館)、昆虫生態学

・シーボルト収集の鳥獣類標本について

久松 正樹 氏 (ミュージアムパーク茨城自然博物館)

・ナガサキアゲハの江戸参府

(総合研究博物館開示研究系 宮崎克則)





## 活動状況（展示・講演会関係）

### 講演会

平成17年11月13日

公開講演会「シーボルトが集めたニッポン」を、箱崎キャンパス50周年記念講堂4階大会議室で開催しました。

### 公開展示・特別展示

平成17年10月17日～11月13日

特別展示「ひとあし先に行ってきた☆伊都キャンパスの植物たち」を、箱崎キャンパス50周年記念講堂で開催しました。



### サテライト展示

#### ●福岡空港第1ターミナル2階待合室

平成17年8月3日～

「川と海の生命展(3) 海の生命を守ろう」を展示中。

#### ●福岡市保健環境研究所まもる一む福岡

平成17年11月2日～

「植物をもっと知ろう～植物と人～(1)」を展示中。

#### ●前原市伊都文化会館

平成17年7月18日～10月14日

「九州の地下資源(金)2」

平成17年10月15日～平成18年1月8日

「九州の地下資源(地熱)1」

平成18年1月9日～

「九州の地下資源(地熱)2」を展示中。

社会連携経費で新キャンパスに隣接する糸島郡志摩町、二丈町に新たに展示ケースを設置しました。

#### ●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

平成18年1月19日～

「福岡県で絶滅に瀕している植物たち」を展示中。



#### ●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉さららの湯」

平成18年1月19日～

「絶滅に瀕している植物たち」を展示中。



## 活動状況（その他）

平成17年10月7日

岩手大学で第8回国立大学博物館等協議会が開催され、村江達士館長、松隈明彦副館長、都築健二専門職員が参加しました。

平成17年11月2日

「九州大学博物館事業に関する第2回講演会」と「協力研究員・運営委員・学外関係者・専任教員等による意見交換会」を、九州大学50周年記念講堂小会議室で行いました。グラスゴー在住の石井千恵さん（フリーのミュージアムエデュケーター）を講師として、「博物館のマーケティング及び海外の大学博物館事情」について御講演いただきました。

### 運営委員会

平成17年9月30日（書面）、10月26日、12月7日（書面）、12月13日（書面）

### 外部評価委員会

平成17年12月18日

### 学芸員海外派遣研修

平成17年11月24日～12月24日 松隈明彦副館長がフランス国立自然史博物館で、「フランスの学芸員制度」等の研修を受けました。

### 訂正

ニュースNo. 5 (p.6)の赤峰倫佳さんの名前が間違っていました。お詫びして訂正します。（誤り）倫子 （正）倫佳

## 九州大学総合研究博物館ニュース

The Kyushu University Museum News

No.6, March 2006

発行:九州大学総合研究博物館 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL & FAX 092-642-4252 ホームページ <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷:城島印刷 有限会社 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102 FAX092-524-4411